

イランの魅力 ～食べ物、人々、歴史と文化



イラン三菱商事会社 社長 梨本 博

はじめに

「イランの魅力、変化」というお題をいただいた。変化というのは、過去のある時点と現在を比較してその差は何かという点を指摘するものだが、筆者の場合、過去のどの時点と現在を比較すべきかが、いささか難しい。筆者が初めてイランの地を踏んだのは、35年前の1988年10月、大学生の頃で、その後現在に至るまで一貫してイランと付き合いしてきた。従い、折々の変化を想起することは可能だが、どの時点を「過去」として固定し比較すべきかが難問なのである。そこで、本稿では寧ろ一貫して「変化しない」イランの魅力を紹介したい。

隠れたイランの魅力

イランは魅力に溢れたユニークな国である。だが残念なことに、過剰防衛意識から来る自己印象操作、カムフラージュがあだとなって「危険」「過激」など悪いイメージばかりが国際社会に拡散され、定着し、自縄自縛に陥っている感がある。現地を訪れ、一皮剥いてみると、イランは拍子抜けするほど普通の国で、良識ある心優しいイラン人で溢れている。そんな一面を中村安希が見事に捉え、鮮やかな筆致で描いた珠玉のエッセイが『インパラの朝』（集英社）に収められている「イラン [バラ色のジャム]」である。一読をお勧めしたい。

テヘランで暮らしていると、金融制裁、ネット規制、交通渋滞、大気汚染、禁酒など日常的な苦勞が絶えず、心が折れそうになる。しかし、そんな様々な障害を、辛抱強く、時にイラン人の助けを借りて乗り越えさえすれば、また違った風景が見えてくる。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」である。

イランはアラブの一国と誤解されることがままある。南西部フーゼスターン州を中心にアラブ系住民も一部存在するが、全体としてイランはアーリア系のペルシア人が過半を占める多民族国家で、アラブの一国ではない。アラブと混同されるとイラン人は憤慨するが、確かに混同され易いのは無理もない話だと思う。

というのも、例えば「アラジンと魔法のランプ」、「アリババと40人の盗賊」、「シンドバ

『アラビアンナイト』(千夜一夜物語)は、入れ子構造の枠物語で、全体を覆う外枠、導入部のシャフリヤール王とシェヘラザードにまつわる物語の舞台は、アラブの国ではなく、実はササン朝ペルシア時代(224-651年)のイランなのである。

そのササン朝は、642年に第2代カリフ・ウマル率いるアラブ軍の侵攻を受け(ネハーヴァンドの戦い)、651年に第3代カリフ・ウスマーンの時代に滅亡し、その後9世紀中頃までに大半のイラン人はゾロアスター教からイスラム教、つまりアラブ発祥の宗教に改宗した。セム語族のアラビア語とは言語系統の異なる印欧語族のペルシア語も、アラビア文字を借用することで延命した。こうしてイランは、外形上アラブと判別し難くなった。

こうしてみると、イランはカメレオンが保護色を駆使して周囲の色と同化して身を隠すように、イスラム化以前の真の姿をアラブ風に塗り替え、カムフラージュしてしまったことが、アラブの一国と誤解される一因になっている。それも元を辿れば、異民族支配下においてイラン人としてのアイデンティティを密かに保持し生き延びていくために、本性を煙幕で覆い隠すかのような、意図的でしたたかな防御策だったと言えよう。

イランの食べ物

本題に入る。イランの魅力を身近で分かり易い「食べ物」と「人々」、深く分け入り探究しないと見えてこない「歴史と文化」の3点に分けてご紹介したい。

まず1点目の「食べ物」といえば、何をおいても果物である。本稿執筆時点(真夏)では、サクランボ、アンズ、『西遊記』で孫悟空が腹一杯食べた「不老長寿の実」とされる扁平な蟠桃(座禅桃)はじめモモ各種(英語のpeachの語源は「ペルシア」)、ブドウ(語源は一説にペルシア語の酒杯「バーデ」)、サクサクした歯触りの「ハルボゼ」などメロン各種、イチジク、桑の実、スイカ、洋ナシ、リンゴなどが八百屋の店頭を埋め尽くしている(写真参照)。秋から冬にかけてはオレンジ、レモン(何れも語源はペルシア語)などの柑橘類、ザクロ、柿、キウイなどが現れる。

筆者がブドウの皮や種をこまめに取り除いて食べていると「何やってんの?」とイラン人から注意を受けることになる。ブドウの粒は丸ごといただくものだという。スイカの種



テヘラン北部タジリーシ商業地区の八百屋
(筆者撮影)

も言わずもがなである。さすがにザクロは種を出すのだろうと見ていたら、ゴリゴリと音を立てておいしそうに食べている。以後、筆者も倣うようにした。種にこそ栄養価が詰まっているのだという。

日本に比べイランの果物は乾燥した気候のせいか糖度が高い上、酸味のアクセントが効き、えも言われぬ濃厚な味を醸し出している。市場（バーザール）をそぞろ歩くと、更に濃厚な味のドライ・フルーツが、ピスタチオやアーモンド、クルミなどのナッツ類、サフラン、ターメリックなど多種多様な香辛料とともに売られている。世界シェア9割を占めるイラン産のサフランには、中期記憶を司る海馬をアルコールによる麻痺（飲酒に伴う記憶障害）から防御するクロシンという成分が含まれているという。そのサフランが禁酒国イランの料理に必須の香辛料としてビルトインされている背景には何らかの事情があるはずだが、読者の想像にお任せすることにして、本稿では敢えて深入りしないことにする。

大型の鉄串に羊のミンチ肉を巻き付け、トマトや青唐辛子と共に炭火でこんがり焼いた「クービーデ」キャバーブは、日本人好みの定番料理である。イラン北東部の宗教都市マシュハド近郊シャーンディーズ村のご当地料理「シーシリーク」（骨付きスペアリブ）や「マーヒーチェ」（すね肉の煮込み）も絶品で、首都テヘランでも人気メニューである。イランの羊は臀部に脂が塊となって溜まるため肉に臭みが少ないのだという。確かに羊肉に馴染みのない日本人でも抵抗なくモリモリ食べられる。その他にも、素朴ながらも香ばしい焼きたての「サンギャック」はじめ各種ナーン（パン）など、おいしい食べ物は数え上げればきりが無い。

イランの人々

2点目はイランの「人々」だが、これが一番面白く、魅力的である。

既述の通り、内面的には「良識ある心優しい人々」は、外形的にも俳優と見紛うばかりの美男美女が多い。鼻が高く、目も口も造作が大きく、サングラスが良く似合う。筆者のような「平たい顔族」は却って目立ってしまう。地方の観光地を訪れると「子供と一緒に写ってほしいと言ってまして。いいですか？」と親から写真撮影を求められたりする。「今日、平たい顔族に会ったよ！」などと即日インスタに上げられているのかも知れない。

イラン人は困っている人、特に外国人を放っておくことができない。道端で困った顔をしていると、必ず誰かが助けの手を差し伸べてくれるというのは、昔から「イランあるある話」として日本人バックパッカーの間では語り草である。筆者も偶々出会った見ず知らずのイラン人から何度「おれんち来い」攻勢を受けたことか。夕食に呼ばれ、家族や親戚が集まり、どう見ても人数の3倍以上の量が盛り付けられた豪勢な大皿料理が所狭しと食卓に並ぶ。あれもこれもと勧められ、お腹がはち切れそうになった頃「どの料理が一番よかった？」と尋ねられる。迷いながら「これかなあ」と指差すと「さあ、どうぞ残りを全

部召し上がれ」とすかさず取り皿に盛られてしまう。「おもてなしトラップ」に引っかかり涙ながらに平らげることになる。夜も更け「そろそろお暇します」と言うと、今度は「泊まってけ」攻勢が始まる。昔お世話になった筆者の郷里信州の親戚の家を懐かしく思い出す。

イラン人は休日になると、公園や幹線道路脇の緑地帯に莫産を広げ、お茶を淹れ、車座になって家族や友人たちとおしゃべりに興じる。そのうち男が炭で火を起しBBQが始まる。そんな時は、見て見ぬふりをして素通りしなければならない。通りすがりにうっかり目が合おうものなら、両手のひらを飲食物の方向に向けて、思い切り「どうぞ！」と勧められてしまう。これは「タアーロフ」と称する一種の社交辞令、単なるポーズであって、本気で誘っているわけではない。まともに取り合わず、胸に手を当て丁重にお断りするのが正しいお作法である。「え、いいんですか？」などと車座に割り込んでいくのは、礼儀知らずの反則行為である。

「タアーロフ」といえば、どこの店で買物をしても、レジの店員は取り敢えず「ガーベリ・ナダーレ（お代は要りません）」と言う。くだんのお誘いと同様、幼い頃からそうしろと躰けられているのである。ここでも「え、いいんですか？」とタダで商品を持ち帰るのは反則行為で、「マムヌーン（そういうわけにはいきません）」と押し戻して代金を支払うのが慣例である。一連の通過儀礼は煩わしくもあるが、微笑ましくなくもない。そんな迫真の演技を眺めていると、まるで本気であるかのように振舞うイラン人はつくづく役者揃いだと感心してしまう。

「タアーロフ」で衝撃的だったのは「ネクタイ事件」である。5年ほど前に駐イラン日本国大使ご主催の天皇誕生日祝賀レセプションで、進出日系企業各社が宣伝ブースを出展したことがあった。当社のブースに、緑色に輝く模様も派手なネクタイを身に着けた若手のイラン人ビジネスマンが立ち寄った。軽く挨拶を交わし「それにしても素敵なネクタイですね」と筆者は心を込めて褒めた。すると彼は何を思ったか、ネクタイをさっとほどき、受付机にポンと置いて「ベファルマーイ（どうぞ、差し上げます）」と言い捨て、人込みの中にすっと消えてしまったのである。一瞬あっけにと取られ呆然としたが、気を取り直し「待って下さ〜い！」と後を追うも時遅し、見失ってしまった。筆者が欲しがっていると思い込み「タアーロフ」を実践すべく気前良く贈呈してくれたのであろう。以来、筆者は他人の持ち物をむやみに褒めないよう注意している。

イランの歴史と文化

最後の3点目は、筆者が最も惹かれるイランの「歴史と文化」の魅力である。

イランは「詩」の国である。イラン人は自国の悠久かつ栄光の歴史、文化的な伝統・遺産に強烈な愛着と誇りを持っている。中でも10-15世紀に黄金期を迎えたペルシア古典詩

を家宝のように慈しみ、数百年から1千年も前の古典詩人たちを未だに敬愛し、その詩を数多く暗唱し、廟に参る。中でもフェルドウスイ、ハイヤーム、サアディ、モウラーナー（ルーミー）、ハーフェズの5人が一般に5大詩人と称されるが、14世紀の抒情詩人ハーフェズは「コーランのない家庭はあってもハーフェズ全集のない家庭はない」と言われるほどの人気者である。ヤルダー（冬至）やノウルーズ（新年）のイブ（前夜祭）には、ハーフェズ全集を用いた占いで一家団欒の場が夜更けまで盛り上がる。

筆者は一時期、古典詩の先生に師事してハーフェズの詩を20篇ほど読み込んだことがある。日本人の感覚からは過剰と思える賛美の修辞や比喩表現の裏側に秘められた含意を読み解くのも楽しかったが、声に出して朗唱すると音楽のような韻律に陶醉感すら覚える。内容はといえば、恋焦がれる絶世の美女の容姿をおよそ思いつくありとあらゆる美辞麗句で褒めそやすも袖にされ続ける哀れな男の叶わぬ片思いを切々と詠った詩が多い。崇拜する神に近づこうと粉骨砕身精進してもたやすく手が届くものではないという喩えだという。ハーフェズは、わが宗派では必ずしも酒はご法度ではない、禁じられているのは傍らに恋人もなくひとり淋しく飲む酒だ、と「ひとり酒」を戒めている。これも「神を求めよ」と諭しているというのだが、文字通り素直に読んだ方が、寧ろ納得感がある。

ハーフェズの抒情詩に甚大な影響を与えたとされる、同郷のシーラーズ出身で13世紀中頃に頭角を現した教訓詩人サアディは、著書『ゴレスターン（薔薇園）』の中で、君主がリングを1個盗めば家臣たちはその木を根こそぎ奪い、君主が卵を1個盗めば家臣たちは鶏をことごとく串焼きにしてしまうだろう、と述べ、君主たるもの常に身を清らかに保ち公正な行いで率先垂範に努めねば世の中が乱れに乱れると「割れ窓理論」を先取りしたかのような戒めを説いている。かと思うと、参謀は徒に自らの作戦案に固執することなく、君主の作戦案にさえ賛同しておけば、たとえ後日敗戦したとしてもお咎めは受けない、などといった「ゴマすりの勧め」的な処世術を説いているのも面白い。

悠久の歴史を誇るイランは観光資源に恵まれている。ユネスコ世界遺産として文化遺産が24件、自然遺産が2件、計26件指定されており、25件の日本を凌駕している。例えば、エスファハーンにはサファヴィ朝期（1501-1736年）の青を基調としたアラベスク文様の流麗な彩色タイルに輝くドームを頂く絢爛華麗なモスクがあり、シーラーズ近郊にはアケメネス朝期（前550-前330年）の壮大な支柱や写実的な壁面彫刻が残るペルセポリスの宮殿跡があり、ゾロアスター教徒の故地ヤズドにはササン朝期（224-651年）の鳥葬の塔がある。筆者お勧めの世界遺産は、ザンジャー西方のゾロアスター教神殿跡に囲まれた火口湖「タフテ・ソレイマーン」と、アフワーズ北方のローマ兵捕虜を使役して建造した「シューシュタルの歴史的水利施設」の2件で、何れもササン朝期の水に縁のある遺跡である。エスファハーンのモスクは一見してその価値が分かる例外的な存在だが、大抵の遺跡はじっと目を凝らしても、何も語ってくれない。遺跡の真価を理解するには、背景知識が必須

となる。情報量が多ければ多いほど、目に見えないものが見えてきて、感動が深まる。それが遺跡めぐりの醍醐味であることを筆者はイランで学んだ。

例えば、イランは旧約聖書の舞台としてしばしば登場する。「バビロン捕囚」（前597-前538）を解きユダヤ人を自由の身にしたとして讃えられているキュロス大王は、アケメネス朝の創始者である。「エステル記」の主人公でアケメネス朝のクセルクセス王の王妃となったエステルとその養父モルデハイの廟は、イラン中部ハメダーン市内のシナゴグにある。異説もあるが「ダニエル書」の主人公で獅子の洞窟に投げ込まれ無傷で生還するダニエルの廟も、イラン南西部フーズスターン州のシューシュ（スーサ）市内にある。ピスタチオのかけらが入ったヌガーのような 에스ファハーン の銘菓「ギャズ」は「出エジプト記」の中で神がモーゼの祈りに応えて天から降らせ民の飢えを救ったとされる「マナ」を模したものである。

サファヴィ朝期からカージャール朝期（1796-1925年）にかけて発展した絨毯、細密画、書道、陶器、鏡細工などイランの伝統工芸品、美術、音楽なども、高度に洗練された文化遺産として魅力的である。精緻な手織り絨毯は、芸術作品であると同時に実用品でもある。極めようとする奥が深い。初回のテヘラン駐在時代（1992-96年）、絨毯に造詣の深い日本企業の経営者が現地へお越しになった折に、制作後100年以上を経たアンティーク絨毯の品定めにお付き合いしたことがある。当時筆者も主要産地の絨毯であれば色彩と文様から一瞥すれば産地が特定できるようになってはいた。しかし、その経営者は絨毯商が勧める逸品を撫でながら「君、分かるかな。これは実に残念だ」と仰る。筆者も真似て撫でみるが、さっぱり分からない。「これは秋刈りの毛だよ。夏は暑いだろう。だから風通しが良く太く硬い毛が生える。食い詰めた羊飼いが冬を待てずに刈り取って売った毛がこれだ。良い絨毯は冬に生え変わった細く柔らかい毛を使わないとね」と解説して下さり、いたく感服した。

おわりに

一貫して変化しないイランの魅力を「食べ物」「人々」「歴史と文化」の3点に分けて、その一端を僅かながらご紹介した。まだまだイランの魅力は語り尽くせないが、百聞は一見に如かず、読者におかれては、現地にお越しになり、この国の隠れた魅力にぜひ直に触れていただきたい。